

小阿彌陀經の成立

眞 野 龍 海

(一) 淨土經典成立に關する諸說について

本題目については、他の淨土經典、大乘初期經典の成立とともに種々論じられて來ており定説を見ない。しかし、若干、掘り下げられていない點があり、とくに、これを中心として私見を述べる。

そこで、これら諸說の中、二、三について問題點を指摘しよう。⁽¹⁾望月博士の説は、小阿彌陀經（以下、小經と略稱）は般舟三昧經行品に基いて成立したとする考え方の中心ともなるものである。博士の説を要約すると、次の通りである。(1)般舟三昧經は、阿彌陀佛を説く現在最古の經典で、紀元前一世紀頃に初めて編纂された。(2)小經は、般舟三昧經行品に基くもので、理由は、(a)小經の、一日乃至七日持名臨終見佛の思想が、行品の、七日七夜見阿彌陀佛の説に合し、(b)小經の六方諸佛證誠は、般舟三昧經の十方現在佛悉前立の説から來たと思われるからである。(3)小經は、大阿彌陀經（以下、大經

と略稱）の抄略でなく、大經以前の成立で、且、成立の歴史を異にする。

この中、(1)については、般舟三昧經の第三譯、賢護分の「如來滅後……五百年末一百歲中……得是經……」と、歴史上の事實との對比によつて示されたのである。しかし、般舟三昧經のはるか後代六世紀の第三譯の數字によつて、同經の成立を云々する事是不合理である。同じ表現は他にもあり、例えば、八千頌般若經も、最初期大乘經典として定説ある所であるが、初譯道行經⁽²⁾、第二譯大明度經では、「如來去後……我經但欲斷時」という箇所が、五世紀初の第三譯小品では、「後五百歲時」となっているが、同様の論法で行くと、般舟三昧經も、最古の般若經も、成立は同時代という事になる。五百という數字は、歴史とは別問題として考うべきではなからうか。

(1)については、更に考うべきは、望月博士は、般舟三昧經の四譯の成立順について、拔陂菩薩經、一卷經、三卷經、賢

護分の順とされるが、そうではない。椎尾博士、池本重臣氏の如く、一卷經、三卷經、拔陂菩薩經、賢護分というのが妥當である。前三者の順は、次のように、一字一句を對照す、

一卷般舟三昧經⁽⁸⁾ 念 西方阿彌陀 今現在 隨所聞當念
三卷般舟三昧經⁽⁹⁾ 心念 西方阿彌陀 今現在 隨所聞當念
拔陂菩薩經⁽¹⁰⁾ 便起意念言 阿彌陀佛爲 在何方 如是所聞

↓ 去此 千億萬佛刹 其國名須摩提

↓ 去是 間 千億萬佛刹 其國名須摩提

↓ 去是佛國當過百千億 佛界 名須摩提國

在衆菩薩中央 說經 一切 常念阿彌陀佛

衆菩薩所聚聽尊說法已 不亂意 常當念是國地

このように一卷經と三卷經との共通部分は、同一譯語で、且、三卷經が、やや擴大し、拔陂經は、更に、増大を示している。従つて、拔陂經を最古とする考の望月博士の御説は、

原典學的に問題を生じてくる。

(2)の(a)については、とくに、本論文の中心となる所であるから、次の節で、くわしく論ずる。(b)の般舟三昧經の十方諸佛が、小經の六方諸佛となつたという事は、二つの點で不合理である。一には、十方が、六方になるのは經典増廣の原則に反する。二には、般舟三昧經の十方諸佛は、觀想の對象であり、小經の六方諸佛は、むしろ、諸佛長廣舌相による證明の小品般若經的増大である。

(3)の小經、大經は別の歴史という點は、同感であるが、博士によると、小經は素朴で、大經の前で、大經は阿闍佛國經

れば、直に判明するのである。即ち、經典は、増廣發展するのが原則である。

便生念在西方阿彌陀佛如來正覺所治也

↓ ↓ ↓

の後とされる。すると般舟三昧經と大經の間が遠くなる。この兩經の順は逆で、無理である。

以上のように、般舟↓小經と云われるのは、譯經史の點からかと思われるが、小經を大經の前に置く點では、必しもそうではない。

とにかく、博士の説には、問題點を含んでいる。

次に、椎尾博士は、(1)阿闍↓般若↓般舟↓彌陀と説く一方、(2)小經は、大經と般舟經との間の成立で、大經以後とも説かれる。即ち、大經↓小經↓般舟の順となる。この不一致を指摘した人はないが、(1)ならば、望月博士に同じく、(2)ならば、本論文の趣意と同じとなる。

次に、中村元博士によれば、(1)佛像が、西紀元後に作られた史實に基き、佛像に言及する淨土經典は、紀元後の成立で

ある。又、(2)ヴァースデーヅ(一四五―一七六年)治世に、塔が多く作られ、以後、激減したという考古學的調査に照らせば、塔崇拜に言及せず、佛像崇拜(或いは佛の觀想を強調する)淨土經典は、この治世以後の段階を示すとされ、小經と大經の成立は、A・D一四〇年、もしくは、少し以前とされている。

さて、この説は、「しかし漢譯年代を考えると、」とあるように、若干、年代的には、翻譯上限との間が窮窟となる。(1)の佛像の問題は、(2)の所にも(或いは佛の觀想)とあるように、大經については「佛像」の文字はあつても、石造、石刻等の像でなく、全て觀想のイメージで、實在ではない。恰も、佛の座のみを示して、そこに佛を想像した如きものである。初期兩大經の中輩段の「自化作佛像」は、*buddha-nirmita* もしくは、*nirmita-buddha* であり、道行經の化作佛⁽⁹⁾ *tathāgata-vigraha* に同じく、造像でなく、心像の形である。これを裏付けるのは、初期兩大經に、佛を見んとするならば、「當日沒處、爲無量清淨佛(阿彌陀佛)作禮」と示す文等で、造像は表面化せず、拜佛の對象は抽象的な西方という方角である。大經では、第三譯に「起立塔像」と出るにすぎない。

(2)について、塔は、道行經と同じように、「作佛寺起塔燒香散華然燈……」とある。従つて、古譯大經は、造像は未だ

なく、起塔の時代を反映するから、博士の御趣旨によれば、むしろ紀元前に遡つての成立を考える方がよいのではなからうか。

因みに、般舟三昧經で、四行の一について、

(一)卷般舟三昧經一者作佛形像用成是三昧故

(三)卷般舟三昧經一者作佛形像若作畫用是三昧故

(チベット譯)……*de bshin gśégs pañi sku-gzugs* (= *pratinā……or kāya-rūpa*)

と述べ、明らかに、一卷は佛像、更に三卷は佛畫までを説く事は、般舟三昧經が、大經乃至小經より後である事を示すとも云える。

道行經功德品では、書經、供養香蓋旗幡等と共に、造塔を相當述べている。しかし、同經の中、第二次成立部で般舟三昧經の後のものとされる曇無竭菩薩品第二十九では、はつきりと、佛像禮拜を示し、畫師、工師について序述がある。しかし、大經(小、且、純淨土教的小經はとにかくとして)には、このような明示は一つもない。

故に、この起塔と造像に關して、紀元前に道行經、大經、紀元後に、般舟三昧經、更に道行經第二十六品以下という成立次第が推定される。

以上の各説を検討して、次のように云いうる。

(1)小經が般舟三昧經により出たという考は漠然とした想定

である。

(2) 椎尾博士は、望月博士と同趣旨と思われるが、又、大經、小經は別系統ながら、成立順は、大經↓小經↓般舟三昧經であるとも述べられており、此點を從來の學界では取り上げていない。

(3) 中村博士の御指摘を、上述のように擴大適用すると、般舟三昧經は、紀元後の可能性が強く、大經は紀元以前となる。また、博士の推定では小經はさらに前と說かれている。

約言すれば紀元以前の小經の成立を否定する要因はなく、小經、特に大經は般舟三昧經に先行するという斷定の可能を示すのである。

(二) 般舟三昧經々文「隨所聞」

小經の成立について、次の二點が正しく取り扱われた事がない。(1) 小經と同文があるため成立問題の基點となる般舟三昧經行品の「隨所聞」の文、(2) 同經との關係に於ての成立を常に羅什譯の小經について論じ、それ以前の同經典の原始型からの發展過程を考えないという事である。

(1) の「隨所聞」は、チベット譯では、*ji skad du tnos pa-
hi rnampas* で、聞くが如きの行相によつてという事である。即ち、見佛せんとする行者が、それまで聞いた通りの極樂彌陀の莊嚴相好によつて念ぜよ、というわけであるから、

般舟三昧經の成立時に、すでに、例として引かれる程の淨土教思想の固定乃至經説があつたと見るべきである。ところが、逆に、引かれた經典小經が、それを引用した經典般舟三昧經に基いて出來たというのは、餘りにも不合理である。

その引用とされる箇所は、別表(一)(二)の一連の文である。(一)の箇所は、羅什譯小經、チベット譯小經、チベット譯般舟三昧經を對照する。

表(一)の②、③の空白は、「……と名づける……」の語に當り、本質的には譯に變りはない。又、④は「今現在」である。⑤は「菩薩所聚中に」で、小經各異本ともなく、第四譯、第五譯の大經には對應箇所存する。

阿闍佛國經では、二異本とも、「菩薩摩訶薩に」という形で說かれている。これら以外は、ほとんど同文である。

そこで考えられる事は、本論文の中心となる背景であるが、兩經のチベット譯は、原始小經の出現から、略八百年以後の譯であるにかかわらず、兩經が、たとえ定型句の所であっても、甚しく一致する部分を有する事は、兩者の相互關係を示すものである。即ち、今まで云われるが如く、般舟三昧經に基き、小經が出たというならば、八、九世紀の間には、當然、後に出來た小經の文が増廣するはずである。

ところが、相異らず、むしろ、小經には、④、⑤の部がない。やはり、小經が先在して、引用された事が、當初より自

別 表 (一)

A	羅 什 譯「阿彌陀經」(大正12, 346c)	=	(1)	從	是
S	チベツト譯「阿彌陀經」(西藏大藏經 vol. 30, 90-2-7)	=	sañs	rgyas	kyi shin hdi nas
P	チベツト譯「般若三昧經」(西藏大藏經 vol. 32, 104-5-2)	=	sañs	rgyas	kyi shin hdi nas
A	西 方 (II)	過 十 萬 億 佛 土			—
S	nub phyogs logs su	sañs	rgyas	kyi shin bye ba	khrag khriḡ ḥbum ḥdas pa na
P	nub phyogs logs su	sañs	rgyas	khi shin bye ba	phrag ḥbum ḥdas pa na
A	(III) 有 世 界 名 曰 極 樂 (W) 其 土				—
S	ḥjig rten gyi khams bde ba	can shes bya ba	yod de de na	(①)	—
P	ḥjig rten gyi khams bde ba	can	(②)	na bcom ldan ḥdas	—
A	有 佛 號 阿 彌 陀				—
S	de bshin gśeḡs pa dgra bcom yañ dag	rdsoḡs paḥi sañs	rgyas tshe dpag med ces	bya ba	—
P	de bshin gśeḡs pa dgra bcom yañ dag	rdsoḡs paḥi sañs	rgyas tshe dpag med	(③)	—
A	(V) 今現在				—
S	(④)	(⑤)			—
P	de da ljar byañ chub sems dpañi tshogs	kyis yonś su bskor cin ḥdun du	bdar te		—
A		(W) 說 法			—
S	bshugs te ḥtsho shin gshes la	/ chos kyañ ston to //			—
P	bshugs so // ḥtshaho	/ gshes so / chos kyañ ston to //			—

明で、後代に到つてもその事を經典傳承者達が意識し、小經の發展變化に應じ、般舟三昧經の引用文も合せていつたのであろう。

大經の該當部分と比較すると、別表(一)の(II)の箇所が、大經第一、二譯では、「去是閼浮利(提)地界千億萬須彌山佛國」となつており、般舟三昧經各異本、大經第三譯以下とも異り、大經が、般舟三昧經より先在たる事を示す。しかし、大經の序述次第は、第四譯法賢譯を除き、初期より、別表(一)の(I)と(V)に對し、略、(IV)(V)(VI)(I)(II)(III)のタイプとなつてゐる。

だから、般舟三昧經は、右の(I)と(V)タイプの先行阿闍佛國經になつた小經の序述順の中、一卷般舟三昧經では、見佛中心であるから、引用文(「隨所聞」以下)の前に、「念西方阿彌陀佛」の句を出し、次に(I)(II)(III)と次第し、三卷般舟三昧經には、元に戻つて、阿闍佛國經にならない、小經(V)に、「在衆菩薩中央」の文を付加した。大經も上述の如く、第四譯で、この文を付加したのは、同時代であつたかも知れない。

とにかく、別表(一)の箇所は、般舟三昧經の先在の大經とは合わず、小經と一致し、小經の先在を示す。

次に(二)の箇所は、經文そのままでなく、主要意味を取り出して對照した。

別 表 (二)

	(I) 行 者	(II) 所 聞	(III) 所 念	(IV) 持 戒	(V) 心 構	(VI) 念 持 期 間	(VII) 行 果
一卷般舟三昧經	(比丘・比丘尼・優婆塞優婆夷)	(持戒獨一處止)	念 佛	戒	一心	一日～一七日	見佛
三卷般舟三昧	沙 門・白 衣	聞西方阿彌陀佛	念 佛	戒	一心	一日～一七日	見佛
拔陂菩薩經	菩薩・白衣・學者	聞阿彌陀佛國	念 西 方	戒	淨心	一日～一七日	見佛
賢 護 分	善男子・善女人	如 聞 繫 念	念 佛		一心不亂	一日～一七日	見佛
チベット譯般舟三昧經	菩薩・白衣・出家	如聞阿彌陀佛相好(rnam pa)	念 佛 相	戒	一心不亂	一、二日～七日	見佛
チベット譯阿彌陀經	善男子・善女人	聞阿彌陀佛相(mtshan)	念 佛 相		一心不亂	一、二日～七日	往生
羅什譯阿彌陀經	善男子・善女人	聞說阿彌陀佛	執持名號		一心不亂	一、二日～七日	往生
玄奘譯阿彌陀經	善男子・善女人	聞阿彌陀佛功德名號極樂莊嚴	(聞已) 思 惟		繫念不亂	一、二日～七日	往生
平等覺經(中輩段)	沙 門	(作佛寺……)	欲 生	戒	不斷	一日一夜	見佛往生
平等覺經(下輩段)	(凡 人)		念 生	戒	不斷	十 日	往生
平等覺經(十九願)	他方佛國人民		欲 生	(正爲) 道			來生

(二)の箇所は(一)の程一致しない。(一)に準じ、文を略、分類すると、(Ⅰ)行者、(Ⅱ)所聞、(Ⅲ)所念、(Ⅳ)持戒、(Ⅴ)心構、(Ⅵ)念持期間、(Ⅶ)行果となる。チベット譯の小經と般舟三昧經との大きな差は、(Ⅰ)で、前者は、善男子・善女人、後者は、菩薩白衣出家となっており、他の般舟三昧經と對照すると、前者は、第四譯賢護分、後者は第三譯拔陂菩薩經に近い。經典發達の上からは、善男子善女人で、持戒を説かない方が純淨土教、後代淨土教的である。この意味で(Ⅳ)の持戒も、小經にない。これは、般舟三昧經は、少くとも第一譯では、出家教團を中心とする行者であるから、持戒は、引用淨土經典文に付加せざるをえない項目であつた。

さらに、兩經は、(Ⅶ)の行果で、見佛と往生との相違があるが、經の主旨が異なるから當然である。

以上の兩經の本質的異りの(Ⅰ)(Ⅳ)(Ⅶ)を除くと、別表のように、略一致する。

しかし、大經とは、(Ⅰ)も、大經は、欲生の者であり、物質的善根を積み、(Ⅳ)が、往生であつて、小經、般舟三昧經の佛、佛相、佛名等でない。兩經の念佛往生に對し、大經は念生往生である。(Ⅴ)も、大經のみ不斷と表わし、(Ⅵ)も、一日一夜十日十夜の發展のタイプで、一↓七日と異なる。故に、般舟三昧經は、大經より小經に一致する點が多い。

般舟三昧經に先在淨土經典がなければならぬが、大經か、小

經かと云えば小經である事となる。

(三) 原始的小阿彌陀經

何度も云う如く、經典は、何百年かの間には、必らず發展があり、原則として、小から大へ、又、發展の中には、いつまでも變らない傳承部分と、擴大の部分と、付加、乃至は、缺損の部分と、及び、再構成とを含んで受けつがれていくものである。

小經では、表示した西方淨土の文の如きが不變の傳承部分である。擴大の部分は、六方という一語が、六方段に擴大したのであるとは、すでに云われる通りである。又、一つの動詞、例えば、願う、生ずる、聞く、という言葉が、一つの時稱が三つに、一つの動詞が、三つ、四つと多くの同義語にと擴大される。先の阿闍佛國經の「已生阿闍佛刹者」が、後の不動如來會では、「若已生若今生若當生」となり、先の平等覺經が「當往生無量清淨佛國」が、後の無量壽如來會では「若已到今到當到……」となる。小經でも、羅什譯の「聞是經が玄奘譯では、「或已得聞 或當得聞 或今得聞 聞是經已」と、三時と連體法までに開いている。従つて、小經の「已發願今發願當發願……若已生若今生若當生」は、明らかに原始の形ではない。

又、「一日二日……七日の文であるが、八千頌般若にも例

がある。同經異本、第一譯では「日日哭」、第二譯は「日哭」⁽³⁷⁾であるが、羅什譯小品では「若一日乃至七日」、施護譯「一日二日乃至七日」となり、さらに梵本では、「一日夜、もしくは二、三、四、五、六、七日夜」となる。従つて羅什譯小經も、少くとも、一卷般舟三昧經の「一日一夜若七日七夜」という原始の形までは遡れると考えられる。その證として、羅什譯以前の求那跋陀羅譯、小經では、「或一日七日」とある。

次に、第二の箇所「念佛見佛」の羅什譯の「執持名號」が、梵本の「作意」に當たる事になるのが問題にされるが、要は、右に述べた經典の發展の流れと勘案して考えらるべきである。結論から云うと、梵本の「作意」（玄奘譯の思惟）の形の方が原始の形を伝え、「執持名號」が、後代となる。なぜならば、般舟三昧經は、古譯より各異本共、念阿彌陀佛、念佛意、念我（＝佛）名であり、四紙小經も「專念彌陀佛名」であり、執持名號が見られないから、原始は、「作意」の方のテキストであり、「執持」の羅什本は、むしろ、後代の文殊般若經に近い。即ち、同經は、⁽³⁸⁾ *tasya nāmadheyam śrī-bhṭayam tac ca nāmadheyam śrūtōpalabhya……* であり、執持して、聞くのだから、執持（＝取）は、稱名の行動を伴うものと考えてよい。玄奘は審取と譯している。この念名↓聞名↓稱名の流から見れば、やはり原始の形は、念名、

即ち作意名號であつたと考えられる。

次に、五濁を小經が述べる事は、やや初期大乘經典としてはふさわしくなく、大經では、第三譯の無量壽經以後であり、他の初期大乘經典では法華經に出るが、道行般若經には現われていない。

しかし、阿闍佛國經には、阿闍佛が正覺を成じた時は、「穢濁思想」⁽³⁹⁾を棄てるといい、阿闍佛國には、短命者、惡人、穢濁劫、諸結、穢濁等の惡穢濁（*snigs = kaṣāpa*）がない、等の序述があるという事は、逆に、この世は五濁的世間という事になる。

だから、阿闍佛國經の後の、原始的な小經には、當然、この初期的ならざる五濁という整つた形でない劫濁思想の表現はあつたと考えられる。

（四） 結 語

以上、要するに、小經の成立に關しては、羅什譯小經の文を、そのまま基に考えずに、小經發展の流れに於て考え、原始的な小經を設定するならば、般舟三昧經の前に小經を認める事による矛盾（小經に含まれる後代的諸要素等）も消え、且、般舟三昧經の「隨所聞」の文が、意義づけられる。

従つて、原始的な小經は、大經と、相前後して、般舟三昧經の前に發生したもので、二世紀シナ傳譯の道行經（常啼品）

の前に般舟三昧經、その前に、大經、小經となるから、西歴紀元前⁽¹⁾一世紀頃に骨格を形成したと考えられる。

- 1 望月博士『淨土教の起源及發達』(昭和五年)、同『佛教經典成立史論』(昭和二十二年)。
- 2 大正・十三・八八四a、b。
- 3 大正・八 四四六b。
- 4 大正・八・四九〇a。
- 5 大正・八・五五五b。
- 6 椎尾博士『佛教經典概説』(昭和八年) 三一五頁の表(一)等に暗示され、又、直接、口授を受けた。
- 7 池本重臣氏『大無量壽經の教理史的研究』(昭和三十三年) 九〇〜九四頁。
- 8 大正・十三・八九九a。
- 9 大正・十三・九〇五a。
- 10 大正・十三・九二二a。
- 11 椎尾博士『佛教經典概説』(昭和八年) 二七三頁。ただし、同二二〇頁には、思想としては般若と同代に彌陀が成立した事を、般舟三昧經は示すと云われる。この意味では般若、彌陀、般舟。同上、三八六頁。この矛盾を、この發表に際し、椎尾博士に對し直接どちらかお尋ねしたが、今は少し考がちがうとて、明確なお答が受け取りにくかった。
- 13 中村・早島・紀野譯註『淨土三部經下』(昭和三八年) 二〇二〜二〇六頁。
- 14 大正・十二・二九二a。大正・十二・三一〇b。

小阿彌陀經の成立(眞野)

- 15 大正・八・四七一b。
- 16 Abhisamayālaṅkāralokarā Prajñāpāramitāvyākhyā, ed. by Unrai Wogihara, Tokyo, 1932-1935, p. 932.
- 17 大正・十一・二九八c。
- 18 大正・十二・三一六b。
- 19 大正・十二・二七二b。
- 20 大正・十二・二九二a。大正・十二・三一〇a。
- 21 靜谷正雄氏『インド佛教碑銘目録』(一九六四年) 五五頁。碑銘目録六一七番、マトラー出土佛坐像臺座銘文には、カニシカ紀元(多分)二二年に佛の像(buddha-pratima)を造立すとのあるは、現存最古の「佛の像」と明記するものという。石像等の像は pratimā の語を用いた事が判かる。ただ、像を造るのは、佛であつても、菩薩であつても、善根功德とされた事が同書の他の銘文によつて明らかである。焼香散華等の一般佛教的功德であるから、もちろん彌陀等のそれでなく、しかも、それを中輩往生の生因の中に、大經、第三譯は攝した。放光般若經には、「若見二佛形像、意常在佛」(大正・八二・八a)とあり、梵本 Pañcaviṃśatisahasrika Prajñāpāramitā, edited by N. Dutt, Calcutta, 1934, p. 218, l. 8 とは yad buddha-vigrahaṁ dṛṣṭvā na jātu buddha-manaskāreṇa virahito bhavati……とある。佛形像は buddha-pratimā ではなく、buddha-vigraha であるが、文の内容からすれば、具體的な像でなければならぬ。この經の成立は紀元後一、二世紀と考えられるから、佛像の歴史とも矛盾しない。

小阿彌陀經の成立(眞野)

- 22 大正・八・四三二・c等。
- 23 大正・八・四七六・b~c。
- 24 造像について。角川書店『世界美術全集 19 インド』(昭和三年)一七〇~一七一頁、「佛像の誕生」(上野照夫氏)同一九八頁、「マトウラー佛の手本」(山本智教氏)。山本氏は、佛像をつくりはじめたのは一世紀にさかのぼると考えるのは無理でないと説明する。クマールスワミ・山本氏譯『印度及び東南亞細亞美術史』(昭和十九年)七〇~七一頁。角川書店『世界文化史大系インド東南アジア』八二~八三頁(紀野一義氏)同、八五頁(高田修氏)。資料について石上善應氏を煩わせた。
- 25 中村・早島・紀野『淨土三部經下』(昭和三八年)二〇六頁。ただし、同、一八二頁では、大經原型成立後、ほん一世紀後に小經が成立したとしている。
- 26 赤沼智善氏『佛教經典史論』(昭和十四年)四〇八頁。
- 27 大正・十二・二八三・a。
- 28 大正・十二・三〇三・b。
- 29 池本重臣氏『大無量壽經の教理史的研究』(昭和三十三年)九二~九四頁。
- 30 大正・十一・七五八・c。
- 31 大正・十二・一〇七・b。
- 32 大正・十二・二九九・b。
- 33 大正・十一・一〇〇・c。
- 34 大正・十二・三四八・a。
- 35 大正・十二・三五一・a。

- 36 大正・十二・三四八・a。
- 37 大正・八・四七一・a。
- 38 大正・八・五〇四・a。
- 39 大正・八・五八〇・c。
- 40 大正・八・六六八・a。
- 41 Abhisamayalamkāraśloka Prajñāpāramitāvyākhyā, ed. by Unrai Wogihara, Tokyo, 1932-1935, p. 931.
- 42 Saptasatīka-Prajñāpāramitā, ed. by G. Tucci, memorie della Reale Accademia Nazionale del Lincei, Anno cccxix 1922, Serie Quinte vol. XVII, Fasc. III, Roma, 1923, p. 134.
- 43 大正・十一・二七三・c。
- 44 大正・十二・七五五・a。
- 45 大正・十二・七五七・b。
- 46 西藏大藏經、三二卷・一四三~二一七。
- 47 岩本裕博士『極樂と地獄』(一九六五年八月)八三頁。本論文と別の立場、法華經との連關から、小經原型は、西歷一〇〇年前後あるいはその以前と推定されている。本論文發表後に、これを得たのであるが、大經の性格、法華經との連關について示す所多く、又、本論文のふれえなかつた點でもある。(右は昭和四十年度文部省科學研究費による綜合研究の一部である。)